

平成 28 年産大豆子実に発生した主要な病害虫について

平成 28 年産大豆子実における主要病害虫の発生状況と防除対策をまとめました。次作に向けた対策の参考にしてください。

〔発生状況〕

病害では、紫斑病およびべと病の被害粒率が平年より高く、広範囲で発生がみられました（表）。また、虫害では、吸実性カメムシ類の被害粒率は平年並でした（表）。本年は、開花期以降にあたる 8 月中旬～9 月中旬の降水量が平年より多く、病害による被害粒の発生を助長する条件が続いたと考えられます。多発した圃場では、次作に向けて、下記の防除対策を講じてください。

表 平成 28 年産大豆子実における主要病害虫の発生状況

病害虫	被害粒率 (%)			発生地点率 (%)		
	本年	平年 ¹⁾	順位 ²⁾	本年	平年	順位
紫斑病	1.4	0.6	2	85	39	1
べと病	4.0	1.1	1	85	47	2
吸実性カメムシ類	2.9	2.7	6	85	87	6

1) 平年：平成 18～27 年の平均値

2) 順位：本年を含む過去 11 年間における本年値の順位

〔調査圃場〕 県内 13 地点の大豆圃場（タチナガハ 8 圃場、納豆小粒 4 圃場、里のほほえみ 1 圃場）

〔調査方法〕 10 株（/圃場）の上位 20 莢程度（合計 200 莢程度）を採取し、子実の被害を目視で調査した。

〔採取時期〕 平成 28 年 10 月第 4、5 半月

〔防除対策〕

＜紫斑病＞

- ① 種子や被害茎葉は翌年の第一次伝染源となるので、収穫後の被害残渣は適切に処分する。
- ② 連作を避ける。
- ③ 防除適期は開花期の 20 日後頃である。開花期から成熟期までに連続した降雨がある場合は、開花 30 日後に追加防除を行う。
- ④ 県内では、チオファネートメチル剤に対する耐性菌が出現しているため、それ以外の薬剤を使用し、2 回目の防除を行う際は、薬剤耐性菌の出現を防ぐため、1 回目に使用した薬剤とは FRAC コードもしくは系統の異なる薬剤を散布する。
- ⑤ 収穫が遅れると発生が多くなるので注意する。

＜べと病＞

- ① 種子や被害茎葉は翌年の第一次伝染源となるので、収穫後の被害残渣は適切に処分する。
- ② 連作を避ける。
- ③ 密植を避け、風通しを良くする。
- ④ 発病初期からの薬剤防除を徹底する。なお、納豆小粒は、タチナガハに比べ発生が多い傾向にある。